

『農村をめざす人々 ライフスタイルの転換と田舎暮らし』

相川良彦・會田陽久・秋津ミチ子・本城昇共著（筑波書房）

本書は「農村をめざす人々」（副題：「ライフスタイルの転換と田舎暮らし」）というタイトルであり、近年は類書が書店にあふれているのはご存知のとおりである。最近ではライフスタイル、さらには人生哲学の考え方が、以前とはかなり変わってきているようである。

英国では、庭のある暮らしを理想とし、老後はカントリー暮らしを志向することは、よく知られているが、本書の冒頭に知り合いの在日フランス人の話として、「日本では田舎という悪いイメージだが、フランスでは良いイメージでとらえる」とあり、ライフスタイルの考え方について、日本でも変化がみられるようになってきた、ということかもしれない。

さて本書の特徴として、まずあげるべきなのは、実際に農村移住者の多い土地の中から、北海道新得町・富良野市、山形県高畠町、京都府美山町の3ヶ所を絞り込み、移住者たちの移住の動機、経過、現在の暮らしを聞き取り、「できるだけリアルに、簡潔に紹介する」というもので、他にあまり例を見ないものである。すなわち、どのように生まれ育ったか、どのような信条や夢を持っていたか、

なぜ、当地へ移住したか、いかなるプロセスを経て移住し、移住後は何を生業として暮らしているか、等を記述し、「臨場感あるヒューマンドキュメント」を企図している。多くの場合、田舎暮らしの本は、著者が一方的に、暮らし方の紹介や注意点を述べるものが殆どであるが、本書は実体験者の話を、いいことも悪いことも、赤裸々に、同格に扱い、記述している。この点について本書では、農村移住というライフスタイルの転換をとまな

うような体験は、少数、多彩、個性的であるので、数量的にとらえるまえに、その個性を、移住者個々の実像として知る必要があったとしている（章で移住者の統計的整理はなされている）。移住タイプとしては、「新規就農」派、「兼業的農業従事」（11a以上耕作）派、「自給農業」（10a以下耕作）派、「田舎暮らし・住環境志向」（農業はしない）派等に大別している。

さて注目され、今後増加が見込まれるタイプである「団塊世代の田舎暮らし」について、本書の事例はホースセラピーの乗馬場と農業体験宿泊などの民宿経営というやや特殊なものであるが、実際の事例は、既述の移住タイプの様々な組み合わせがありうるだろう。今後、田舎では、過疎化による地価・借地料の低額化が進行して、「ミニ新規就農」派や「自給農業」派の団塊世代移住者は益々多くなるのではないか。17年度食料・農業・農村白書でも「団塊世代に注目」と、紙数を割いている。

一方、受け入れる集落側も、「新参者である等々の分け隔てなくやってくれて、何でも仲間に入れてくれる」という環境が欠かせない。また「新規参入者が、特定作物の産地でもないエリアで慣行栽培をして、農協を通して市場へ出荷しても、まともな値段はつかない。有機農産物なら、少しずつルートを開拓し、扱ってくれる店や個人客を増やしていける利点があり、新規就農のやり方としては無理がない」という点も、実体験に基づく説得力がある。

（2006年1月 税込み1,050円 111頁）

（平岩 直）